

蕉風無格



序

三

蕉翁以英傑之姿隱於俳句者也其吐  
性靈片言隻語以者莫不悅服焉可  
謂奇矣翁云非蘇新黃奇不可為矣  
其有身得之効可見已夫詩者本於性  
情而已紀固有定格也意境融徹出音  
聲之外者為詩之妙詩妙謂之天籟  
天調也俳句亦何異焉哉今集其天



調而奇新者使翁在焉則亦宜不唾棄  
此編邪

慶應元年十月 支峰閣人 謹題

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of the text on the reverse side. The characters are highly stylized and difficult to decipher, but appear to be a single column of text.

の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども

の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども  
の御話の御座り候へども  
我々御座り候へども

うもふしむのふみよふふふふふ  
おおのうもふふふふふふふふ  
うもふしむのふみよふふふふふ  
ふもふしむのふみよふふふふふ  
いふふふ

孝の巻えん八月

源信章

しる

蕉風無格

蘇室久安撰

翁の俳諧や今人の俳諧や更ふらる所を  
かゝる所を無格や奇新とあり今人を格有く  
奇新と翁と格なくして奇新あはれのみ無格と  
少くやも奇新とつゝくくる道わ  
むや嗚呼奇新と心悟や思ふ  
俳諧と可忘不可為註師とあはるる  
あはるる初心と則名人もれを初心のこころ

の詩も忘れるるゝ故ふ翁曰俳諧と門前の  
婆々ふ問るゝや則禪語ゆゝよく知識成  
忘るゝ俗ふ落れ事なき真言なるを

園能竹の志ひきこる枝ゆふなき即あまき  
ありき有高さありひききあれなきは  
芭蕉庵の翁の風雅ゆゝ無格たる格あり  
格有るゝ無格たるを找みの無格をけり得れを  
格と自然の格ゆゝ更ふ本嫌ひなきの煩らるゝ  
さるゝ事なるるゝその隠逸幽情の巻々

わゆる中ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
らみ少るゝ無格をありを以て此れを  
やむ事を得ざるを

有聲之画。無聲之句。忘知識。  
忘見解。忘分別。忘順送。無轍  
之境。無格之妙。今所撰此集。  
獨坐小室。默然悟入。可以養  
出靜中端倪者也。

炭俵の巻也  
 其巻の序ふ  
 有聲此繪を  
 あやとる云云  
 則蕉翁の巻  
 みれ有聲の  
 繪をあやと  
 故なり風雅ふ  
 心悟存きり  
 人ふあやとる  
 有色の繪を  
 うたふ事あ  
 たり及

うらふ香子の花やりた出の山崎れ芭蕉  
 少くもあつふ維子の啼きたけ 野坡  
 家善清をたれのも遠く取月く  
 うみれたるるにあらぬ来の道 蕉  
 宵のうらけしきせし月けき  
 藪越えぬきあきた海き 坡  
 舌頭へ葉もくげく迷惑は  
 娘をうたふ人へ取もさぬ 蕉  
 ち長るむ杉柳一はれ細き  
 坡

三

月無格

あやとるふれ路ぬら月 蕉  
 秋をうらみそとるにや白河春 坡  
 ひくまの心出れお袋は幸 蕉  
 よもひくう尾の持病を押しさる 坡  
 せんあやくけく泥強も名月 蕉  
 初層しきさ懸り地あやてんれ 坡  
 身代おきて居合ひもぬき 蕉  
 河尻の流くろや酔くあはれ 坡  
 うやうや押あてきまの念佛 蕉

春秋季統

以下春四句  
花を加へく

東風の勢く一建物のつゝぬ吹雪  
たゞ居ぬまゝふ後とけし  
江戸の左と右むしひのらまや  
あちよもつれおこし  
字に十枚紙のうぬの紙  
相の末たぐい月の中  
門一めんもまはるる  
ひらくつゝまはるる  
まはるる女房の親子振舞  
蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡

三

無格まを

まゝ秋のつれも  
法中のお話  
縄をたまたま  
やれ家も  
魚  
ふらふら  
未進の高  
隣へも  
屏風の  
蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡

花坐の恋  
情無格



同卷

そよよけ茶屋のうらやまをまはるる  
芭蕉

そよよけ水鏡のうらやまをまはるる  
芭蕉

土張をぬきぬきうらやまのうらやま  
利牛

そよよけのうらやまをまはるる  
岱水

窓下をぬきぬきうらやまをまはるる  
蕉

そよよけのうらやまをまはるる  
屋

きりぎりすのうらやまをまはるる  
牛

暁のうらやまをまはるる  
水

そよよけのうらやまをまはるる  
屋

堀の附きた  
無意の妙味  
秋句小準して  
外の妙さなる  
是奇也新也  
古今集に  
たのきみの山  
へる遠くを  
吹くころせし

花の香るる  
理これ歌  
よりのうらやま  
早

うらやまを  
見わたるる

紅葉

御膳のうらやま

そよよけの吹

かきもこのうらやま

よりの理と放

情を得る奇

新の手うらやま

たり

僧都のうらやまをまはるる  
蕉

うらやまのうらやまをまはるる  
水

家内をぬきぬきうらやまをまはるる  
牛

齋汁のうらやまをまはるる  
蕉

葉のうらやまをまはるる  
屋

秋のうらやまをまはるる  
牛

うらやまのうらやまをまはるる  
水

そよよけのうらやまをまはるる  
屋

婦人のうらやまをまはるる  
蕉

月花の坐轉  
無格の絶妙

同卷

空をなれ木咲くうらさき妻は縁紙屋

夏の水鶴はをく新清川 芭蕉

土張を海をぬほやのふ峰々 利牛

そはやの持けは酒は夜中 岱水

窓下や誰も寝る夜ぬ音は月 蕉

またやまの堀のころふ秋う路 屋

き理くは子影のうらう鳴出く 牛

咲の結草花を夫とよめをうら 水

ももや紙終ひあう貴を語る 屋

四

堀の附きた  
無意の妙味  
秋句ふ準しく  
外の妙さみ  
是奇也新也  
古今集うは  
たのきみの山  
へる遠々れ  
吹くころせ

花の香るは  
理くは歌う

よらうみは  
早

うらうとを  
見きたるむ

紅葉

御膳うら

まら風の吹

かきもこれ

よらう理と放

情と得る奇

新の手うら

たり

僧都のもやん中法友をやる 蕉

う勢初は長明う及の峰清海に 水

家花をうけははをうらう 牛

齋汁はうらうはるうらう 蕉

葉の冥をうはをうらう 屋

秋香をうらうはるうらう 牛

うはらう柳をうらう 水

雪の吹をうらうはるうらう 屋

婦人うらうはるうらう 蕉

月花の坐轉  
無格の絶妙

芭蕉



こころの奇新より  
かゝる無格と不知  
たゞ月花の坐轉を  
心得ぬれば格との  
うら事の内す

前句の絶妙お  
對ひ忘の字は妙  
可感

雪の跡吹まじ  
たる云又雪形  
厚さゆへに太  
嫌の按排を  
堀の秋もさふ  
風細くも同ド

以卷く所ら  
くお四巻さき  
れを以て共蕉  
翁の意旨貫く  
るれも疑ひ多き  
人の金蘭集さや  
こゝろお合せ見  
天格の巻さやふ  
同くわを知  
つて而く心の奇  
新よりかゝる無格  
とあはるべし

少産乳清の中は乳をすく

を流らば乳清上人阿く

泣き来ればはうお出ま

並むたれたるうぬを尋ね

舌の清ふらうんて清

空を送りて探れ 獨甘

今此まうし言れば

年貢深んたしはあ

息才に祖父の白髪

水

牛

蕉

屋

牛

水

屋

蕉

水

五

堪忍たまぬ七夕

名月のさうし合

きこくしうさ

はこらち高の海

山は根深の

横をうし我

睡のうし

お見ゆや女子

余は軒なり

牛

蕉

屋

牛

水

屋

牛

蕉

水

伊賀の山中  
長野崎  
牙ふ初  
の古跡あり  
たり

猿蓑の序小

我翁行脚の頃伴賀神を志ひ於山中  
めくけくはる小みの法着をく俳諧の神  
を入たすひそれたらしまら断腸乃思ひ

叫ひ多む云云

猿小蓑を著さしつ事よまて小猿小蓑と  
きせしつたあり初時雨猿も小これと  
言ちる事といふの情さるゆゑこころ小徹し  
しひ叫ひ多る事あはれなりとて文苑の  
る情の歎類し通る事禅家小以心傳心  
やつとて不言の不言の不言の不言の不言の  
よるの理也蕉風無格俳諧の宗旨不言の應感  
を以て第一義とす也

猿蓑集

市中々物れあひやや夏の月九兆

あはれしや門くは志忘 芭蕉

二書物や理も案作を極ふ出 去来

仄うらたうれん一投 兆

秋節ら銀も見ぬ子月の中 蕉

たやひひし長き縁若 来

物むふ植こもる夕まに 兆

落れ葉やちふ新柳ゆり 蕉

道心のおらうらな花は合はる 来

其三句の無格  
古人季の自  
然たる可感

五句目の雜  
無格

可見奇新の  
妙味  
花のくりあひ  
く無格

茴香の句は  
絶品蕉風の  
まろこ也

月を花の空  
に置無格

終りのなき尾の冬を待てる

兆

魚の骨志をさす中を此老をみる

蕉

まはる人の心も小虎門の如く

来

三つらも屏風を斜に女子は

兆

海殿を井の菱子遠くを

蕉

茴香は葉を吹おろす夕風

来

僧やいはいく寺をさす

兆

猿曳のさねや昔秋の月

蕉

さす一斗は地子もさす

来

七

月の句作

猿曳の猿と世  
をさすもさす  
つゆも秋月也  
草鞋は月を  
句情甚の赤  
小有故も初秋  
も付も也句は  
詞格も情ハ  
以く作もへ  
秋二句の無格

五六車生来はたたねるもさす

兆

只袋もよよ及意はるも道

蕉

追たてて甲記は馬たうたも持

来

てはらちるもさす水も深いたる

兆

戸は子もさすさすの夢を空海

蕉

天井もさすさすさすさす

来

さすさす竹籠を作る月夜さす

兆

登床もさすさすさすさす

蕉

さすさすさすさすさす

来



此頭書ふも  
せいの無究妙絶  
ありもの此四卷の  
うら一巻小二三ヶ  
所程了有うえ  
らみ出しく深く  
其味ひとまねを  
実し手の舞足の  
ふみ所と思ふ  
なるへ詞と  
はくは事  
心と以くちの人の  
言下なるへ

情のくちをさあめて気味と  
もはねむひくちを忘れる体むり  
迎をさしき殿うらまの好ま  
手は様やうらまはくちの中  
あはれ風をさすは音と  
所内の秋も文部明局  
何をいんねとて  
あやうらまはくち  
木るは那さし  
北 蕉 水 来 北 蕉 水 来 北 蕉 水 来

九

月坐無格

詞格を  
小理不可入  
詞の調

あやうらまはくち  
柴さし  
冬うらまのあはれ  
旅の地をさし  
まはまき  
何おひ  
夕月  
人も  
うらまはくち  
水 北 蕉 水 来 蕉 北 来 水



ね情の通る  
 をうらむ心  
 小堤より田の  
 といふ如く  
 見るといふ詞の  
 意は自らこころ也  
 心格といふ表は静小  
 夫より動は格  
 如く爰小花ま  
 といふは青鷺  
 王其季出る心  
 格は一以る替  
 の天地一沙鷗といふ  
 詩句は去る名句也  
 一以四美殊小美と  
 といふは記得  
 心小有は又眼中  
 の砂金

又も大半は能くさるる出及  
 増より田はまきやあつはきよ記  
 如香のやいふとよき社を  
 如く理は屋をさるるはまき  
 而能やまのまき一正連  
 言はるるまきは牙のたす  
 志よりくまき一箇は幾とん  
 くる機は後にはまき一まき  
 若くはまきあはれのまき  
 水 来 北 蕉 水 来 蕉 北 来

十

蕉風の俳諧三十六句はまき自然の妙要を  
 樂しむのみ翁曰十一句め自ら花はまき  
 やまき又曰花は定坐をまき此詞めまき  
 無格の自然を聞え侍るはまき死格はまき  
 能くはまきまき無格は元まきまき  
 もまきまきまき連歌の格未定まき  
 唱まへまきまき其定まき格はまき連  
 歌は格を付たる格はまき格はまき  
 小まきまきまきのまきまき

去來抄曰羽  
古式を用ひ  
かつめの時  
廢論論事無  
格なる事と知  
るなり

神祇釋教悉  
無常地名これ  
表ふ出たる例  
金蘭集み  
あつたれや  
つて夫となり  
ひんもこと  
侍れ畧ぬ

あゝぬ格了あゝ傍てを蕉風の自然を  
いふ故に無格といふ名を以て  
たるともいふ其の法も非諧を  
いふを心を以て得む後を無格と  
いふ詞も病を捨るは神祇  
釋教戀無常地名を表ふ禁忌といふ  
まづもいふ事なり表  
出る事おの法もいふ出るまづ  
まづいふ格を以て人禁忌

土

やむひを初心の名人たる  
心を樂しむ蕉風の本意とす

慶應元年五月

評曰痴人の夢をいふ也

又曰蘇室 利害の心盡はる故に之の如き  
事を書け

又曰鶴のあゆみの百韻ふ五十韻ハ翁の  
註あはれふ俳諧不可為註といふれ  
非也

又曰猿蓑炭俵々俗の樂々み也と近時の  
諸名家みわつ子ゆふ蘇室ひくう蕉翁乃  
知識をとりしれたる所や々高くいつて  
避也

又曰蘇室の枯野集ふ翁を風雅心とつて  
たつみと道心を以てせし非也

又曰風流のうふうく如きみまう敷  
たつて蘇室風流を志す故也

又曰奇新を論せし無格を論せしは

墮落し無格を論せし奇新を論せしはの  
空蕩し奇新々無格の未發無格々奇新の  
已發也奇新々即無格無格々即奇新々  
みはあふあはなる

又曰蘇室曰これ蕉翁の俳諧とるの奇新  
よるたる無格とるは蕉翁を尊信せ  
る故也但し世間おのれの為ふ俳諧とや  
も此蘇室もおのれを為ふとの無格や  
おもるる蕉翁を尊信せし故也

蘓室

常の業あやしのれり為小俳諧をこころ  
く又何よりせんや俳家又よつろの奇新よ  
アキ。無格をやうけし何を以て蕉翁を  
尊信しややたり尤然を尤然也

又曰金蘭集の天格巻をよみ同くぬら  
くろの奇新よをたのむ無格のほろふ  
聯歌ふあやぬりのをう後世蕉風も定むるの  
格ハ尤痴論といふる蕉風の俳諧たるもの  
奇新のみ今蘇室も論する所實も蕉翁乃

十三

愁眉をこころやいさふれたる

言詮不忘難以認泊船之夢  
道心不了何能聽蕉窓之雨

跋



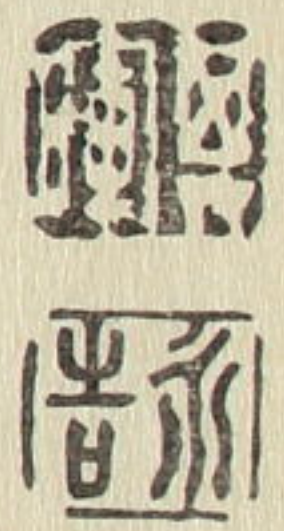
坡老云吾文如行雲流水。  
行於所<sub>二</sub>濟<sub>一</sub>不行止於所<sub>二</sub>得<sub>一</sub>不止。蕉翁之於俳諧。  
想亦當爾。雲容水態自然。

成趣。豈有定格哉。後人  
設格自縛者過矣。讀此  
編則可以知解脫之方  
而得水雲之妙矣。

乙丑桂秋

強其學人暉書於

蕉竹書齋



呈上 雲英雅兄

俊三

